

平成 22 年度

浜田市活性化事業に関する報告書

—「学園と歴史のまち・浜田」づくりのための調査研究—



島根県立大学総合政策学部
光延研究室

池田 愛之 芝 千愛
中間 大輔 原 伸之介
平江 和喜 水原 俊樹
 光延 忠彦

浜田市の活性化事業に関する報告書
—「学園と歴史のまち・浜田」づくりのための調査研究—
島根県立大学総合政策学部光延研究室
2011年2月9日

目次

1. はじめに(光延)	3
2. 調査の概要(光延)	5
3. 浜田市の現状	
(1)住民へのアンケート調査(水原)	8
(2)大学生へのアンケート調査(池田)	11
4. 浜田市の活性化に参考になる事例	
(1)「城をテーマ」としたまちづくり(平江)	18
(2)「時代まちづくり」をテーマとしたまちづくり(中間)	21
(3)「水都」をテーマとしたまちづくり(原)	25
(4)「朝市」をテーマとしたまちづくり(芝)	28
(5)「朝日の上る町づくり」をテーマとしたまちづくり(水原)	31
(6)学園をテーマとしたまちづくり(池田)	34
(7)「夕日」をテーマとしたまちづくり①(水原)	37
(8)「夕日」をテーマとしたまちづくり②(池田)	40
5. まとめ(光延)	43

1. はじめに

浜田市は人口約6万1千人の中国地方北西部に位置する島根県内でも主要な自治体のひとつであり、人口規模の点で見ると島根県内でも浜田市は、松江、出雲両市に続く第3位に数えられる自治体である。このため、島根県内では、両市が擁する公的機関や行政状況を備えている存在にもなっているが、なかでも注目すべきは、人口規模6万人の自治体に大学という高等教育研究機関があるという点である。しかも島根県内には国立と公立のふたつの大学のみが存在する状況であるだけに、大学の知的資源の地域社会での活用が重要な課題になっている。

このように、浜田市は公立大学を有する自治体でもあるため、浜田市と島根県立大学浜田キャンパスとの連携が住みよい地域社会の発展のためには重要となり、両者を通じて、日々、調査や研究が行われている。大学と自治体との知的資源の共有による地域社会の発展は、地方に位置する自治体にとっては重要なことであるが、それに限定されるのみならず、約1千人の大学関係者が2000年の開学以来、恒常的に居住しているという状況は、地域社会に経済的効果のみならず、社会的影響も及ぼして地域社会の活力の向上にも一定の成果を提出している状況になっていっているように考えられる。

また、西日本地域の日本海側に面した兵庫、鳥取、島根、山口の広域自治体の中でも、鳥取市、松江市、津和野町、萩市等とともに、浜田市は、江戸時代から繁栄した旧城下町のひとつでもある。このため、住民気質や町名はもとより、市街地の構成や住居の設置状況等についても、島根県内の他の自治体に比較しても異なり、旧城下町特有の商業地や住宅地の配置になっている状況がある。もちろん、整備の状況は3市においても異なるが、浜田市の場合は、季節によっても住民が多く集い、憩いを楽しめる場となっている城山公園がある。ただ、歴史資源等が十分整っているまでには至っていないため、今後のこの状況のあり方は、さらなる浜田市の発展にも寄与する可能性があり、城山公園に城郭施設を再現しようという社会的活動が存在しているのも周知のとおりである。

このように、島根県浜田市は、6万人という、どちらかといえば日本全体から見ると、小規模の自治体に属するように考えられるが、既述のように小規模の都市であるにも拘わらず、大学という高等教育研究機関や、西日本の日本海側に面した地域では数少ない城下町数のなかでも旧親藩という特徴のある自治体でもあるため、今後の地域社会の発展が期待される場所である。

しかしながら、地勢的な要因をはじめ多様な要因によってであろうが、近年、浜田市の人口も減少傾向を示し、過疎化の進展が存在する事態に至っている。しかも、このような課題の解決は、そう容易ではなく、また、多様な施策も即効的ではないため、中長期的かつ継続的な施策への対応が求められている状況である。

そこで、当研究室は、人口減少傾向への対処などをはじめ、浜田市の抱える

諸課題のうちのごく一端について学生の視点から、一定の提言を試みようとして、「**観光による地域社会の発展**」という視点に着目して、「学園と歴史のまち、浜田」づくりのための調査研究を開始した。当報告書はその調査・研究の成果の一部である。

2011年2月6日

光延 忠彦

2. 調査の概要

今日、地域における高等教育研究機関は、如何にして地域社会と共同して一定の地域貢献を果たすか、その存在意義を問われている。大学という機関は、知的資源を蓄積できる組織でもあるため、研究環境と研究意欲が存在すれば、その成果を地域社会に還元し易いという特徴もある。もちろん、そのためには、一方で、地域社会そのものも調査や研究の環境を整備する必要もあろう。この点で、浜田市は、こうした調査研究への理解が旺盛であり、かつ積極的のため、大学が一定の調査研究成果を提出しやすい環境がある。今日、仮に、本報告に一定の成果があったとすれば、それは浜田市の既述のような理解の故である。そうした努力の上に本報告は成立している。

平成22年2月26日の浜田市への調査研究申請からほぼ1カ年が経つが、当研究室は浜田市と島根県立大学との協働研究事業として、

(1) 調査研究テーマとしては

「学園と歴史のまち、浜田」づくりを、

(2) 調査研究の目的（期待される浜田市への提案等）としては

ともすると、山陰地方といった「暗いイメージ」で表現されてきた「浜田市」を「明るいイメージ」でできるよう、学生の意識に基づいた地域社会の発展＝まちづくりを、学園と歴史という視点を中心に提案することとした。

(3) 調査研究の具体的内容および方法としては

① 学園の視点

- ・ 学生の居住状況の意識の把握
- ・ 大学の存在、人口規模、港町の存在、近隣大都市からの観光客の往来、海という自然資源に面した都市の観点から浜田市に類似する自治体との比較

② 歴史の視点

- ・ 浜田市：浜田城址と滋賀県長浜市：長浜城、滋賀県彦根市：彦根城、滋賀県近江八幡市：水都

③ その他

- ・ 夕日の町：浜田市と朝日の町：千葉県鴨川市との対称性
- ・ 夕日の町：沖縄県読谷村、北谷町、恩納村との比較
- ・ 水産資源の活用：兵庫県明石市の朝市

(4) 協力機関：浜田市の関係部課

浜田市総合調整室
浜田市産業経済部
浜田市地域政策課

(5) 当研究グループの構成

総合政策学部総合政策学科、光延研究室に所属の3年次学生6名

(6) 調査研究実施状況

本報告書の内容は、既述の題目のもと、当研究室に所属する3年次の6名の学生が、浜田市内における聞き取り調査、浜田市関係者への聞き取り調査、さらに市民や、本学学生へのアンケート調査、そして、浜田市の「まちづくり」に参考になる他自治体への実態調査等を通じて得た第一次資料を中心に、学生の視点から、これらの資料を分析解析して一定の結論を導いたものである。

・主な調査日程

4月～5月：文献を中心とする「まちづくり」の事前学習

4月～7月：浜田市街地の現地調査および市庁担当部局での資料収集と聞き取り調査

6月：浜田市住民へのアンケート調査

10月：島根県立大学浜田キャンパス学生へのアンケート調査

10月：沖縄県読谷村、北谷町、恩納村での現地実態調査

10月～11月：和歌山県和歌山市の和歌山大学の「まちづくり」実践例の文献購読

11月：滋賀県長浜市、彦根市、近江八幡市、兵庫県明石市での現地実態調査

11月：浜田市内の旧城下町の風情のある通りや商店街の実態調査

11月：浜田市地域政策課長からの浜田市についてのレクチャー

12月：千葉県鴨川市での現地実態調査

1月：調査のまとめと報告の準備

2月：報告会でのプレゼンテーションおよび報告書の提出

(7) 本報告の内容

以上を踏まえて、以下では、調査の概要で調査研究の全体像を示し、続いて、浜田市の現状を把握する点で、住民へのアンケート調査と島根県立大学学生へのアンケート調査を実施したが、その結果から浜田市に対する住民や学生の意識を把握した。こうした事前準備の上で、各論として、浜田市の発展に参考になる事例として、「城をテーマ」としたまちづくりの長浜市の事例、「時代まちづくり」をテーマとしたまちづくりの彦根市の事例、「水都」をテーマとしたまちづくりの近江八幡市の事例、「朝市」をテーマとしたまちづくりの明石市の事例に加えて、「朝日の上る町づくり」をテーマとしたまちづくりの鴨川市の事例

や大学という学園をテーマとしたまちづくりの城西国際大学観光学部の事例、さらに「夕日」をテーマとしたまちづくりの北谷町の事例、読谷村の事例等、これらを通じて、浜田市とこれらの実態との比較から得られる知見を提出し、最後に全体がまとめられる。

(光延 忠彦)

3. 浜田市の現状

(1) 住民へのアンケート

・はじめに

年々、浜田市では人口や観光客は減少している。そこで、浜田市を発展させるためにはどうしたら良いか調査してみた。このことを通じて、浜田市の経済発展を促し、住民の生活に貢献していきたい。そこで、アンケート調査を実施した。

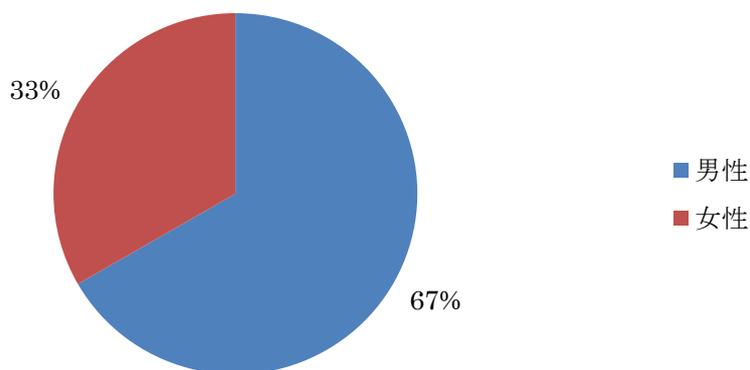
・アンケート調査

サンプル数 100

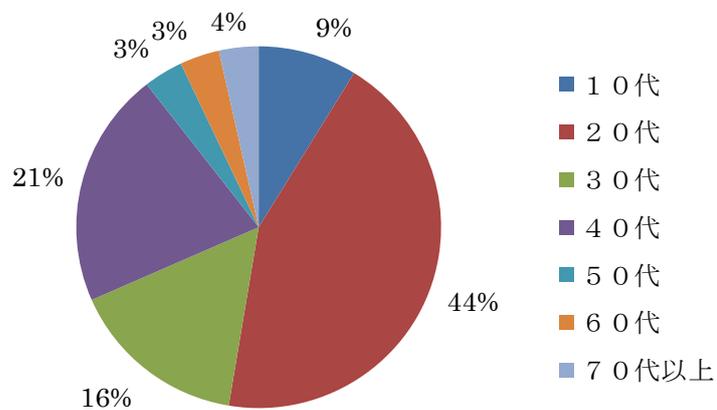
日時 6月16、30日

場所 浜田駅周辺、ゆめタウン浜田店周辺、島根県立大学周辺

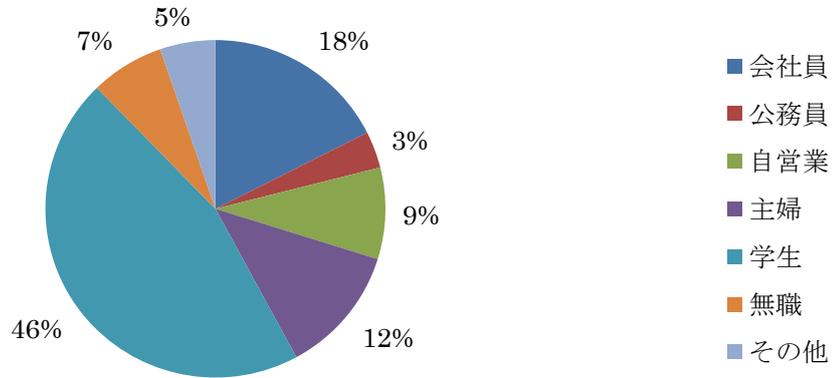
性別



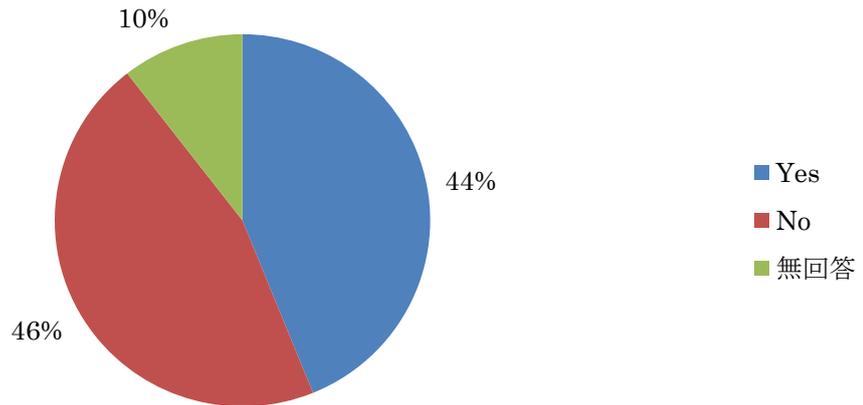
年齢層



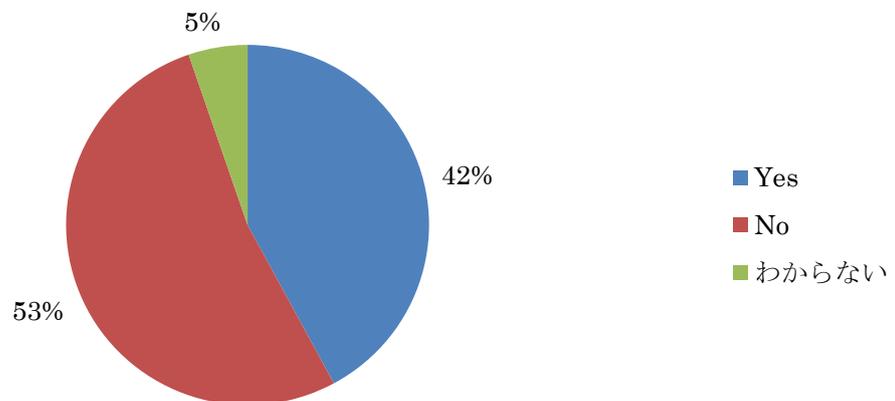
職業



浜田市のイベントに参加していますか？



これからも浜田に住み続けたいですか？



Q1、浜田市にあったらいいと思うものはありますか？

- 1位 娯楽施設
- 2位 ショッピングセンター
- 3位 コンビニ、ファミレス

Q2、浜田市のどんなイベントに参加されていますか？

- 花火大会
- かぐら
- 浜っ子祭り

Q3、浜田市の活性化についての要望はありますか？

- 安全な町づくり
- 若者にやさしい町づくり
- 観光地を増やして欲しい
- 高速道路をつくって欲しい
- 道路を広くして欲しい
- 職場を増やして欲しい
- 家賃を値下げして欲しい
- お祭りなどのイベントを増やして欲しい

・アンケート調査からわかったこと

今回、私たちは浜田市の活性化ということを目指してゼミの活動を行ってきた。主な活動として、4月から7月にかけては浜田駅、ゆめタウン、島根県立大学周辺で浜田市民の方を対象にアンケートを実施した。

そこで、アンケートの内容を見てみると、次の二つの問題が浮上した。

・浜田市のイベントに参加されている方が少ない。

・20～30代の若い世代は、浜田市から出たがっている人が多い。

よって、これらの問題を改善することが活性化につながると考える。

また、活性化の方法については、「浜田には大学があるので、大学生を対象とした活性化をしてみてもどうか？」という意見が多かった為、若者の目から見て魅力のある町づくりが必要であると考えている。

(水原 俊樹)

(2) 大学生へのアンケート

・はじめに

浜田市における人口、観光客は年々減少している。その現状を打破するためにはどのようにすれば良いか調査してみた。この調査を通じて、浜田市の経済発展、及び住民生活の向上に貢献していきたいと考える。その際、多様な意見を取り入れたいと感じ、県立大学生に対するアンケート調査を実施してみた。

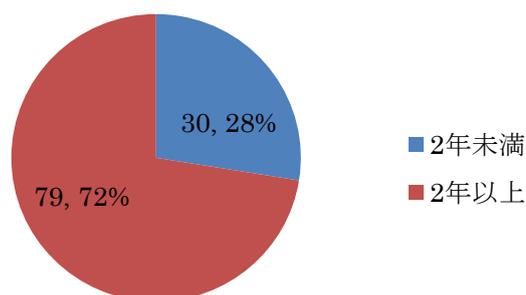
・アンケート調査

サンプル数 109

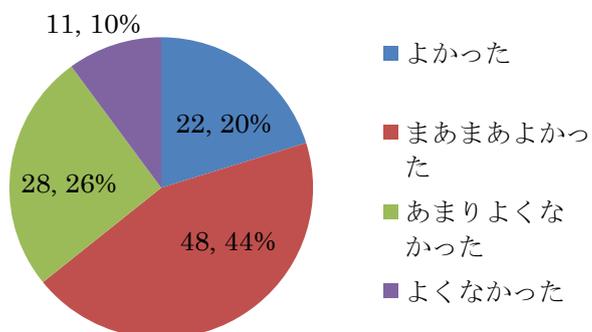
日時 平成 22 年 12 月 8 日～22 日

場所 県立大学、学生の下宿

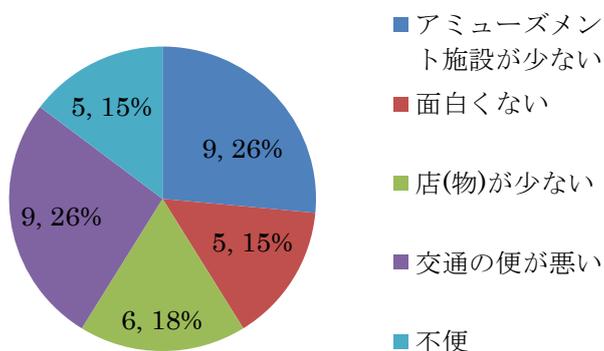
Q1.浜田に居住して何年か



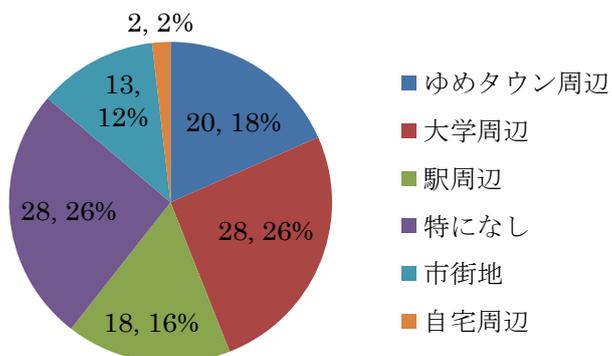
Q2.浜田市に住んで



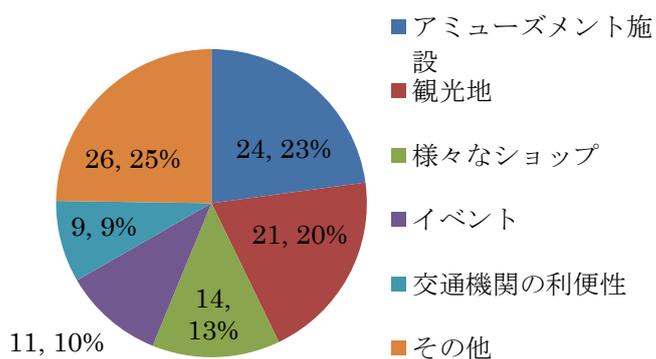
Q3. 「あまりよくなかった」「よくなかった」と回答した理由(回答数 34/39)



Q4. 日頃、生活している中心(回答数 107)



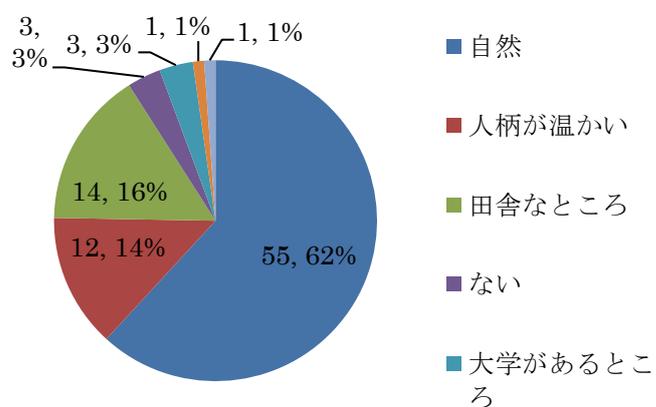
Q5. 浜田市に多くの人を訪れるためには何が必要か(回答数 105)



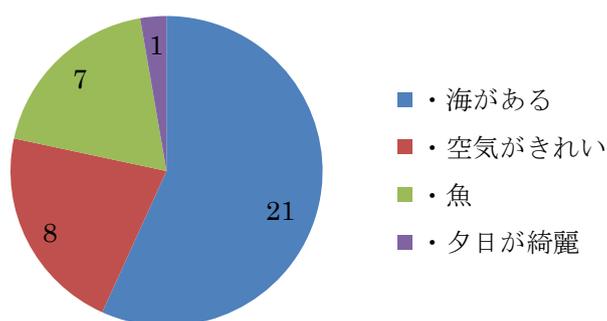
*その他の回答

企業・活気のある街 ・ 政策・グルメ・文化施設・温泉・文化の発展

Q6.浜田市の良いところをひとつ答えるとすれば(回答数 89)



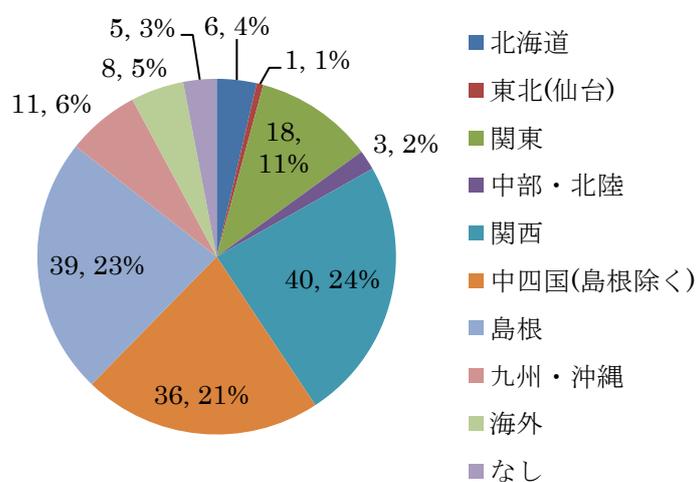
*「自然」という回答の内、具体的な記述があったもの(回答数 37) ※数値は回答数



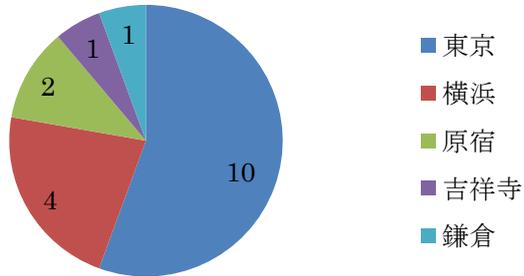
Q7.いままで訪れた町で印象の良かったところを2つ(回答数 167)

*数が多かったため地域ごとで分類する。

①全て

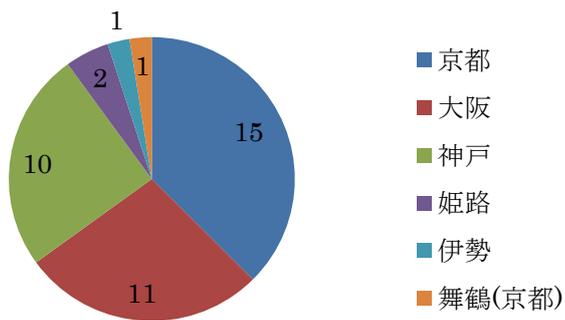


② 関東(回答数 18)

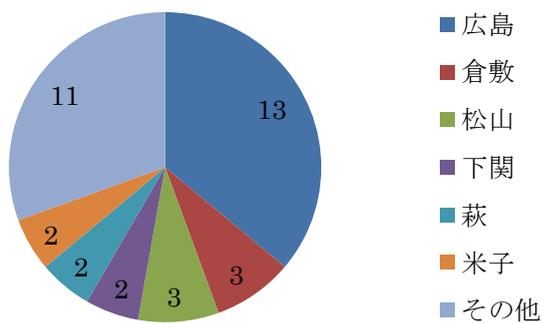


③ 中部・北陸(回答数 3)
金沢・白川郷・名古屋

④ 関西(回答数 40)



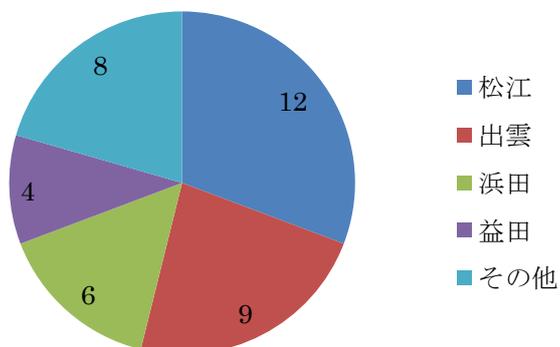
⑤ 中四国(島根を除く)(回答数 36)



* その他の回答

門司・角島・岩国・高松・丸亀・善通寺・鳥取・境港・鳥取砂丘・岡山・三次

⑥ 島根(回答数 39)



* その他の回答

津和野・波子・江津・温泉津・邑南

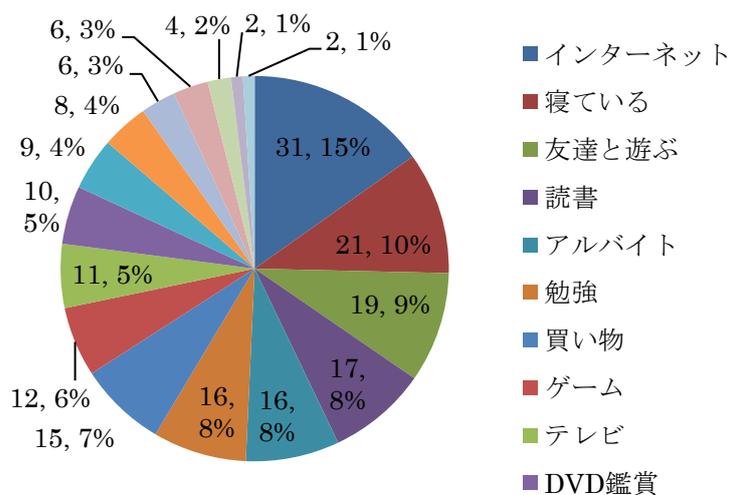
⑦ 九州・沖縄(回答数 11)

福岡(3)・博多・北九州・佐世保・島原・大分・鹿児島・奄美・沖縄

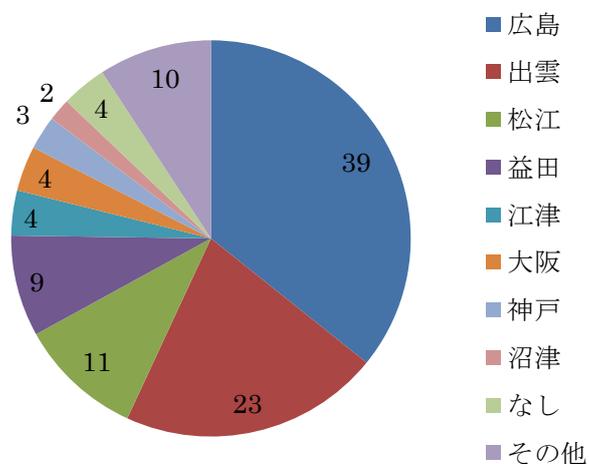
⑧ 海外(回答数 8)

ニューヨーク・ロサンゼルス・ウィーン・ヴェネツィア・マルタ・ローマ・ポーランド・パリ

Q8.日頃、自由な時間を何に使っているか。主なものを2つ(回答数 205)



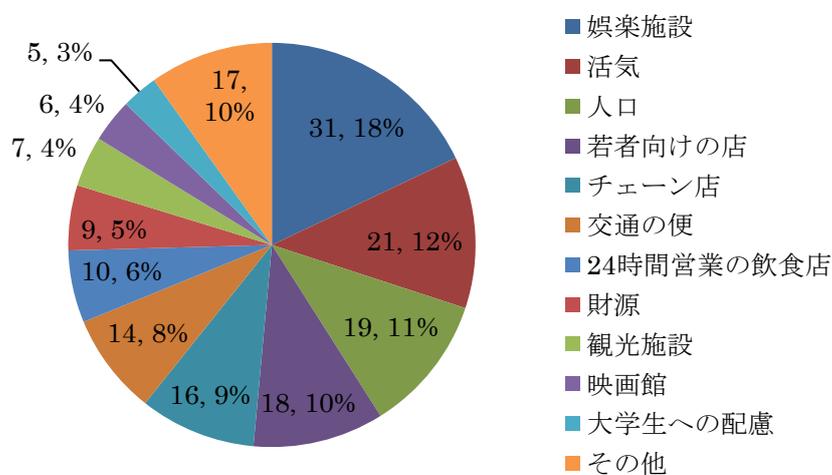
Q9.浜田市以外に良く訪れる町



*その他の回答

三原・倉吉・福岡・高松・大田・鳥取・戸田・八束・群馬・長崎

Q10.浜田市に不足しているものを2つ(回答数 173)



*その他の回答

大規模なイベント(3)・働き口(3)・市外から来た人を歓迎する心(2)・文化施設(2)・治安(2)・高性能なごみ焼却場・コミュニティー・古本屋・政策・企業

・アンケート調査からわかったこと

アンケート回答者の約 7 割が浜田市にきて良かったと答えている。しかし、全体的に娯楽面に関して不満を抱いている傾向がみられる。その証拠に大学生の自由時間について、回答者の約 4 分の 3 が室内(自宅)で過ごしていることがわかる。このことから、浜田市は若者にとって娯楽や刺激の少ない街であるといえる。

回答者の約半数が、浜田市の良いところとして自然環境を挙げている。特に目立ったのは海に関することである。このことから浜田市にかけられる印象として、海を中心とした自然、または田舎という面が強く意識されている。

印象の良かった町として挙げられているところのほとんどが、大都市であったり、観光地として有名な町であったりしていた。

(池田 愛之)

4.浜田市の活性化に参考になる事例

(1)「城をテーマ」にしたまちづくり(長浜市の事例)

・はじめに

私たちは、島根県浜田市を活性化させることを目的とし、研究をしてきた。その一環として、滋賀県に研究調査に行ってきた。その中でもここでは、滋賀県長浜市の事例を挙げていきたい。

なぜ滋賀県長浜市を選んだのか。それは長浜市が、地域でまちおこしをしており、観光事業で成功しているからだ。そこで、長浜市の観光事業を浜田市に応用できないのかを検討していきたい。

まず、長浜市の観光資源を挙げていく。長浜市の観光資源は、長浜城、黒壁スクエア、万華鏡がメインだと考えられる。長浜城は、豊臣秀吉の建造した城として、歴史的価値があり観光資源としての魅力がある。黒壁スクエアは、伝統的建造物を生かした街並みが売りである。また、万華鏡は、8メートルという日本一の高さを誇り、日本一というキャッチフレーズが観光客を呼び込むのに効果的である。

・実際に行ってみて

まず、長浜市に実際に行ってみて感じたことは、駅周辺に観光資源が集中していて便利だということだ。バスなどの公共交通機関を使わずとも、徒歩で観光できるところは魅力的だった。

次に長浜城に行ってみて感じたことは、意外に普通だったということだ。他の城や博物館と同じように資料や説明があり、特に変わったものはなかった。しかし、最上階まで登ると長浜城独自のものがあつた。それは、琵琶湖を一望できることだった。長浜城の歴史も楽しめ、さらに琵琶湖も楽しめるので、観光客が集まるのだとわかつた。



長浜城から観る琵琶

また、黒壁スクエアに実際に行ってみて、ただ単に黒壁だけを売りにしているのではないと感じた。確かに、黒壁という外装を観て楽しむこともできる。しかし、それだけではない。外装は黒壁で統一し、喫茶店やレストランなど一般的な店から、ガラス館やオルゴール店、フィギュアミュージアムなど変わった店まであり、店自体も興味深いものばかりだった。

他にも黒壁スクエアには、まちづくり役場やまちの駅というものがあった。まちの駅では、地域特産物を売っており、地域で協力していることがわかった。



黒壁スクエア

最後に巨大万華鏡を実際に観て、よくできていると思った。巨大だからといって、模様の変化が雑ということもなく、一般的な万華鏡のように鮮やかに変化していた。そしてなにより、入場料が無料なところは魅力的だった。

以上のことから観光事業に大切なものは、付加価値だとわかった。城や黒壁、万華鏡はそれらがあるだけでも、観光観点からは魅力的だが、琵琶湖を楽しめたり、店をこだわったり、入場料を無料にすることで、観光客に一石二鳥だというお得感を与えている。ただ観て楽しむだけではなく、この $+ \alpha$ の付加価値があることで、長浜市は観光客が途絶えることなく、観光事業が成功している。



巨大万華鏡「天の華」

・おわりに

長浜市から学んだことを浜田市に適用して考えてみたい。長浜市と浜田市の観光資源で重なっている物がある。それは、城だ。そこで浜田城もただ観るだけではなく、付加価値を付けてみることを提案したい。例えば、浜田城でイベントを行ったり、城をモチーフとしたキャラクターを作ってPRをしたりなどである。

また、長浜市と比較し浜田市の短所はアクセスの悪さである。浜田市の観光地は、浜田駅から遠く、徒歩では厳しい。そして公共交通機関の便もあまり良くない。こういったことも改善していかななくては、長期的な観光客の増加は望めないだろう。

以上のことから、浜田市には観光地として不足している点も多い。だから、これから可能な限りそれらを改善していくことが必要だ。

・参考文献

パンフレット「黒壁スクエア散策MAP」

長浜城歴史博物館 <http://www.city.nagahama.shiga.jp/section/rekihaku/>

2011年1月12日取得

(平江 和貴)

(2)「時代まちづくり」をテーマにしたまちづくり(彦根市の事例)

・はじめに

彦根市は井伊氏彦根藩のお膝元で、大藩がひしめく京都周辺でも有数の城下町として発達した。滋賀県東部の商工業の中心で、かつては大津市に次ぐ県下第二の都市でもあった。そのため現在も彦根地方気象台・滋賀大学・裁判所支部など各種機関が集中している。また中山道沿線には高宮宿と鳥居本宿の宿場町が栄えた。旧城下町・宿場町の町並みが残っており、2009年1月19日には亀山市・金沢市・高山市・萩市とともに第1回歴史まちづくり法に認定されている。

歴史まちづくり法とは、地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律のことで、日本には、城や神社・仏閣などの歴史上価値の高い建造物、またその周辺の町家や武家屋敷などの歴史的な建造物が残されており、この法律はこのような良好な環境（歴史的風致）を維持・向上させ後世に継承するために制定された。

彦根市は、歴史まちづくり法に基づいた城下町の再生によって、観光客の誘引に成功した町である。

・彦根市の活性化事業実施の背景

昭和初期より銀座商店街が県内屈指の商店街としてにぎわっていた。しかし、オイルショック以後、郊外への住宅地や大型店、ロードサイド店などの立地が進み、人口重心や消費者の利便性から中心市街地は、衰退へと向かっていった。

彦根市における中心市街地にある商店街は、12商店街であるが、その数もピークの800店から400店弱へと激減した。

・彦根市の活性化

平成10年7月に、「中心市街地活性化法」が施行されたことに伴い、彦根市でも中心市街地の持つ役割を見直し、その活性化を図ることによって、彦根市の「顔」としての魅力あるまちづくりの推進を目的とした取り組みを始めた。そして、「市民アンケート調査」や「経営者アンケート調査」を実施するとともに、「彦根市中心市街地活性化基本計画策定委員会」を設置し、約3ヶ月間にわたる調査研究を行い、平成11年1月に「彦根市中心市街地活性化基本計画」が策定されることとなった。

・活性化事業の概要

(1) ハード整備

平成元年から 10 年がかりで「夢京橋キャッスルロード」が街路拡幅事業に取り組み、江戸町屋風のファサードに統一され、年間 45 万人の来街者が訪れるほどの賑わいを回復した。この事例は、市内の各商店街へ成功の事例として波及した。

その後、平成 10 年の中心市街地活性化法の施行と同時にファサード整備事業を花しょうぶ通り（町屋風）・登り町グリーン通り（欧風）・おいでやす商店街（なまこ壁）・四番町スクエア（大正ロマン風）の各商店街が実施、銀座商店街においては、アーケード整備事業、四番町スクエアにおいては、お客様駐車場・テナントミックス施設（食の館「ひこね食賓館」四番町ダイニング）の設置を行った。

夢京橋キャッスルロードと四番町スクエアは観光客を、その他の商店街は地元客を主とする顧客層として事業展開している。

・ソフト整備

商店街ごとに取り決めたコンセプトにより、商店街整備を行ってきたが、完成が始まりとの認識を持ち、ソフト事業に取り組んでいる。

花しょうぶ通り商店街のナイトバザールや地域一体で開催されるアートフェスタ勝負市は、滋賀・滋賀県立・聖泉の各大学生や市民団体とともに実施している。昔の寺子屋を利用した「街の駅」も商人塾として定着してきた。

また、登り町グリーン通り商店街では、おかみさんによる「店先カルチャー教室」や地元アーティストを育てる「NOBORIMACHI グリーンステージ」に取り組んでいる。四番町スクエアは、大正ロマン風の町となったが、脳にやさしい音楽「ハイパーソニックサウンド」や六童子、五灯式のガス灯など話題性が多い。

前述の「街の駅」は、滋賀大学・滋賀県立大学のまちなか研究室としての活用や NPO 彦根観光フォーラム・NPO 湖東焼を育てる会などの多彩なメンバーで構成されている。今後組織の LLP 化((Limited Liability partnership)=有限責任事業組合)も視野に入れてサステイナブルな活動を目指すまでに発展した。

市内の回遊性を高めるため、ユビキタス技術を駆使して、ごく身近なパソコンである「ケータイ電話」を用いて学習型観光を推進している点も波及効果の現れと言える。

・事業の影響

中心市街地の人口減少に歯止めがかかり、住宅・マンションの建設が急増している。都市として住んでよし、働いてよし、暮らしてよしが都市各を形成するとするならば、彦根氏の水準は高いと判断できる。

・観光地としての彦根市

彦根市の観光ルートの定番は、国宝・彦根城とその周辺の社寺を回るものであった。しかし最近では、彦根城を見た後に夢京橋キャッスルロード・四番町スクエアを訪れるという観光ルートが確立されつつある。この二つの通りは観光客を呼び込むことを目的としたうえで、伝統的なまちなみの再生を行ってきた。それにより、彦根城観光客の市街地への誘引に成功している。

また、彦根城のイメージキャラクター「ひこにゃん」の人気も観光客へ大きな影響を与えた。「ひこにゃん」は、2007年に築城400年を迎えた彦根城の記念イベント「国宝・彦根城築城400年祭」のイメージキャラクターとして登場し、全国規模で人気を博した。彦根城の2007年度入場者が、前年度比61%も伸びて84万9056人に達した。彦根市観光振興課では「ひこにゃん」人気の効果が大きいと分析している。彦根城のマスコットとしての存続を願う多くの声を受け、400年祭終了後も引き続き役割を担うこととなった。

・浜田市との比較

彦根市のまちづくりは、国宝である彦根城とその城下町の商店街が核となっており、彦根市に昔からある魅力がうまく引き出されている。しかし、浜田市には国宝などの知名度の高い歴史的建造物などがいないため、彦根市のように城への観光客を商店街に引き込むような形をねらったまちづくりは難しい。

彦根市の商店街の再生も、彦根城から歩いてそのまま訪れることが可能だからこそ効果が大きかったと考えられる。浜田市の場合、魅力として港町だということが挙げられる。しかしそれを観光地的魅力にできるかどうかは難しい問題である。さらに港と市街地との距離があるため、それぞれを観光地として整備しても、彦根市のようにうまく活性化にはつながらないだろう。つまり、彦根市のようなハード事業は、浜田市には向いていないと推測される。

しかし、ソフト面でのまちづくりは浜田市にも応用ができる。彦根市では、それぞれの商店街が掲げたコンセプトにあったイベントなどのソフト事業に地域住民や地元学生などと協力して取り組んでいる。そのソフト事業が観光客だけでなく地元住民にも影響を与えて、中心市街地の人口減少に歯止めをかけている。浜田市もソフト事業についてもっと考えていく必要がある。特にどんちっちタウンは浜田市の看板商店街であるため、そこにソフト面の整備が欲しいところである。また、大学の学生と行うソフト事業というのも、メディアに取り上げられれば活性化に役立つ要因となるはずだ。

・まとめ

以上に述べたように活性化は、それぞれの地域に合った政策をしなければ意味がない。彦根市は歴史を活性化にうまく利用することで成功している。それは、彦根市には活性化に成功し得る要因がもともと存在したからだと言える。つまり彦根市は浜田市に比べ、活性化に向けた町だったことが分かる。だからと言って浜田市の活性化が不可能というわけではない。あくまで彦根市のような活性化は浜田市には向いていないというだけである。

今回彦根市の調査から、活性化にはそれぞれの町にあった活性化が重要だと感じた。浜田市の活性化について長期的に考えればハード事業も可能かもしれない。しかし、先に述べたように今浜田市に必要なのは、ソフト事業での活性化を住民や学生などと連携して行っていくことだと考えられる。

・参考文献

彦根市ホームページ

<http://www.city.hikone.shiga.jp/> 2011年1月16日取得

(中間 大輔)

(3)「水都」をテーマにしたまちづくり(近江八幡市の事例)

・はじめに

近江八幡市は 2010 年 3 月 21 日、近江商人と水郷で有名な(旧)近江八幡市と安土城で有名な安土町と合併して成立した。滋賀県の中央部、琵琶湖東岸に位置する。市域は全般に平坦地で、鈴鹿山系に源を発する諸河川により形成された湖東平野の一角を占める。市内には小高い山が平野に浮かぶように点在している。市の北東部には、西の湖が水郷地帯を展開しており、「安土八幡の水郷」として琵琶湖八景のひとつに数えられている。

また近江八幡市は、豊臣秀吉の甥・秀次が築いた城下町を基礎として、近世は商業都市として発展した。現在では近世の風情がよく残る「新町通り」・「永原町通り」・「八幡堀周辺」・「日牟禮八幡宮境内」は「八幡伝統的建造物群保存地区」として国の重要伝統建造物保存地区に選定されており、時代劇の撮影場所としてもよくつかわれている。

2005 年 9 月 1 日には水郷地域 160 ヘクタールが景観法にもとづく「景観計画区域」の適用第 1 号に指定された。さらに 2006 年 1 月 26 日には「近江八幡の水郷」として重要文化景観の第 1 号にも選定された。

・近江八幡市のまちづくり

近江八幡市は豊かな自然と数多くの歴史的文化遺産に恵まれ、独自の歴史的都市空間を形成している。特に、八幡保存地区は碁盤状の美しい街路の中に立ち並ぶ瓦屋根の商家や町屋など、また八幡堀に面しては石垣・土蔵群など、八幡山を中心に特色ある町並みを形成している。



・町並み保存に対する取り組み

近江八幡市の町並みを構成する上で欠かせないのが、町屋の数々である。しかし、近年では生活形態や社会状況の変化などにより、空き家が増えている。

このような状況の中で、市の関係機関や各種団体、商工会議所不動産部会、町屋の居住者や活用者からなる、「空き町屋活用委員会」開かれている。この委員会では、新たな利用方法や借り手を探しだすことで、町並みの維持を図り、地域住民の定住志向を高め、文化や地域産業の活性化へつなげていくための具体的な仕組み作りを模索している。

・水の郷としての取り組み

● 地域の特徴と整備事業

西の湖は琵琶湖の内湖で、その西側一帯には水郷地帯が形成されている。この地区の大半は琵琶湖国定公園第 2 種特別区域に指定され、さらに琵琶湖八景の 1 つにも取り上げられるなど、自然的にも景観的にも優れている。この環境を利用して和舟による「水郷めぐり」が盛んである。

そのためこの地区の土地改良事業は慎重に進められてきた。昭和 54 年に自然保護や観光、漁業などと土地改良事業の調整を図った基本方針がまとめられ、それに基づいて景観や環境保全に配慮した事業計画が作成された。

● 事業の景観上の特徴

この地区で新たに生まれた景観の特徴を整理すると以下のようなになる。

- ① 土地利用の形態として、従来の曲線を主体とした柔らかい景観から直角に交差する農道や水路に代表されるかたい景観が多くなった。それを和らげるために一部の区間で並木状の植栽がなされた。
- ② 道路の線形も整備事業により直線的となった。それを和らげるため植樹帯や木製の防護柵が設けられた。
- ③ 護岸のデザインは、水郷めぐりの観光コースを中心にヒノキ丸太の護岸や階段状の親水施設が設けられた。また、ヨシを移植した植生護岸や、連結植生ブロック護岸が設けられた。

・まとめ

近江八幡市は琵琶湖や八幡城、城下町であった街並みなどの観光資源を整備することにより現在では年間で 300 万人近くの人が観光に訪れるようになった。実際に現地では平日にもかかわらず観光バスや他県の車が来ており多くの人がいた。

近江八幡市は商店街とメインとなる観光スポットが隣接しているため多くの人が観光後に商店街に行く姿を見ることができた。そうすることで商店街が活性化し地域全体の活性化につながったと考えられる。浜田市はお魚センターやアクアスなど観光スポットはあるがどちらも町との距離があるので観光だけで終わることが多いと考えられる。そのため観光スポットから商店街に行く流れを作る必要がある。

・参考文献

近江八幡市ホームページ

<http://www.city.omihachiman.shiga.jp/> 2011年1月8日取得

(原 伸之介)

(4)「朝市」をテーマとしたまちづくり(明石市の事例)

・はじめに

浜田市は山陰有数の水産都市であり、浜田漁港は、日本全国で13港のみが指定を受けている特定第三種漁港に指定されている。特定第三種漁港とは、鳥取県の境港漁港や山口県の下関漁港なども指定されており、漁獲高は全体の30%を占める。つまり、全国的に見ても、浜田漁港の重要性は認められている。古くから貿易港として栄え、県内一を誇る商港でもある。

特に浜田漁港は「どんちっちアジ」「どんちっちカレイ」「どんちっちノドグロ」をどんちっち三魚として売り出している。その中でも、カレイの塩干品は全国シェア45%で、生産量は日本一である。浜田市や市内水産関係者もこのどんちっち三魚をブランド化し、各媒体を使い大きくPRし、売り出している。

しかし、水産物や水産加工物を売り出そうとする動きは他の市や漁港でもよく見られる。さらに漁業をめぐる昨今の厳しい状況は浜田市も例外ではなく、資源の枯渇や漁業関係者の高齢化、後継者不足などにより、今後も厳しい状況が続くと予想される。

そこで、水産物や水産加工物を売り出すことにさらに力を入れ、街づくりをしていきたいと考える。

・常設朝市（青森県八戸市のケース）ビジネス客や観光客を対象に

青森県八戸市は青森県の南東部にあり、人口約24万人の臨海部には、大きな工業港、漁港、商業港が整備されている。八戸漁港もまた、浜田漁港と同じく特定第三種漁港に指定されている。2002年に新幹線延伸によりビジネス客や観光客が増加した。

なかでも、八戸市の集客産業の目玉になっているのが、「朝市」である。八戸市内には9か所の市場があり、朝と夜の時間を限定して開催している。新幹線の延伸により、ビジネス客が増加した八戸市は、ビジネスマンが比較的自由になる時間帯を狙い、この時間に市場を開く設定にした。これは、新幹線の延伸をうまく利用した事例と言える。

また、観光タクシーや観光バスも運行しており、気軽にアクセスできる工夫がされている。さらに行政が発行した観光マップは、特定の店だけが強調されないように工夫がされている。



<https://www.machigenki.jp/content/view/764/315/> より

・昼網（兵庫県明石市のケース）地元住民を対象に

兵庫県明石市は兵庫県南部の明石海峡に面する都市である。古くから魚の街として栄えている。市街地の中心部には、魚の棚商店街と呼ばれる地元住民から人気の商店街がある。魚の棚は全長350メートルのアーケードに明石の特産物や、水産物、水産加工物などを取り扱う店が約100店舗並んでいる。正午過ぎから明石海峡で獲れた「前モノ」と呼ばれる魚介が運び込まれ、それを目当てに訪れる地元住民や観光客もいる。

魚の棚商店街の歴史は長く、400年前から続くといわれており、明石の水産物や水産加工物は長い歴史の間でPRされていった。

しかし、漁業をめぐる昨今の厳しい状況は明石市も例外ではなく、漁獲高の減少や後継者不足に悩んでいる。



<http://kobe-mari.maxs.jp/akashi/uontana.htm>

・浜田市にどう活かしていくのか

足立基浩著「シャッター通り再生計画」の手法に倣って浜田市、浜田市の水産物について、SWOT分析を行ってみると、「機会」が広島からの近接性、「脅威」が水揚げ高の減少、「強み」が豊かな自然と水産資源、「弱み」が地域ブランド力として、まだ浸透していないこととなった。また、「地域の遺伝子分類」にあてはめると、小規模・大都市近接型・観光型の街である。さらに、浜田道の無料化で、気軽にアクセスできるようになった。そこで、アクセスの気軽さで、日帰り観光客をターゲットにした街づくりを提案したい。

浜田市に多くの観光客が訪れる場所と言えば、島根県立しまね海洋館アクアス、お魚センター、温泉が挙げられるだろう。特に、浜田道無料化が実施されてから県外からの観光客が目立つ。

例えば、島根県立しまね海洋館アクアスに訪れた観光客を市内に回遊させることができ、その目的として、浜田の水産物や水産加工物が挙げられるようになれば、アクアスの開園時間や、季節、時間帯にあわせたイベントなども企画でき、八戸市や明石市のように市場を開く価値はあるのではないかと考える。さらに、明石市のように地元住民の集まる商店街になれば、観光のオフシーズンでも売上が見込めるのではないかと考える。

浜田市でも朝市を行っているが、今行っているものをさらに規模を拡大し、店舗数も本学や浜田市内の高校に呼び掛けて増やしていき、常設にすることができれば良いと考える。

・おわりに

山陰有数の水産都市である浜田の水産資源を今よりさらに活かそうとするには、さらなるPRする場が必要である。

浜田道の無料化などにより、浜田に県外から訪れる観光客が増加している。

八戸市や明石市のように大都市に近接している地の利と今までブランド化を進めてきた水産資源を活かして活性化に繋がれば良いと考える。

(芝 千愛)

(5)「朝日の上るまちづくり」をテーマとしたまちづくり(鴨川市の事例)

・はじめに

今回、私たちは「浜田市の活性化」を目標にゼミの活動を行ってきた。そこで、浜田市の観光に着目して「より多くの観光客を浜田市に呼び込み、活性化を図るにはどうすればよいか。」という視点から調査を行った。

そこで、浜田市が「夕陽の町」と呼ばれていることに注目し、「夕陽の町」とは対をなす「朝陽の町」と呼ばれ、観光地として名高い千葉県の鴨川市をピックアップし鴨川市役所を実際に訪れ研究を行った。

・鴨川市の概略

鴨川市は千葉県房総半島の南に位置する人口 35682 人(平成 20.3.1 現在)の市であり、美しい海岸線やのどかな田園風景などの自然環境に恵まれ、加えて日蓮聖人の生誕の地として豊かな歴史を持つ町でもある。

現在、鴨川市では「観光」が一番の主要産業であり、様々な取り組みを行っている。

・鴨川市と観光

1.観光の歴史

鴨川市では鎌倉時代以降、日蓮聖人生誕の地として巡礼者が多く訪れ、数多くの宿泊施設が発展していた。戦後には保養や海水浴を目的として多くの旅行者が訪れ、鴨川グランドホテル(昭和 27 設立)などの宿泊施設の充実も手助けとなり、長期滞在型観光地として栄えた。しかし、「アクアライン」の開通により都市部からのアクセスが容易になり、日帰り旅行者の増加を招き、旅行スタイルの多様化による団体旅行者の減少により鴨川市の観光は衰退していった。



2.観光への取り組み

上記のような状況を打破する為、鴨川市は新たな政策に取り組んだ。政策を行う上で様々な機関が一体となって政策が進められていった。

- ① 官民一体(市と地元企業、農家)となり、地域ブランドの創出や PR 活動を積極的に行った。
 - ・旅館組合への説明会などを行い、ホテルの意識改革を進める
 - ・一つのサイトでそれぞれの団体へアクセス可能にする等、インターネットによる PR 活動を進める
 - ・田植え体験活動など、地元農家協力のもとでの長期的な農業体験プログラム
- ② 市役所内でも観光課だけが取り組むのではなく、他の課とも連携して観光問題に取り組んでいる。
 - ・鴨川市でお話を伺った際には、観光課に加え産業振興課・教育課の方から共同で説明を受けた
 - ・教育課との連携で城西国際大(観光学部)や早稲田大などのセミナーハウスを誘致
 - ・修学旅行生などの呼び込み
- ③ 鴨川市のみで取り組むのではなく、館山市・南房総市と一体となって「南房総ブランド」として売り込みを行う。
 - ・ホームページ上での南房総 3 市による具体的な観光プランの共同提案
 - ・県外への PR 活動の際における統一のイメージ



・まとめ

以上のように、鴨川市は観光地として売り出す為に「官民の連携」、「市役所内での連携」、「近隣の地域との連携」を強めて取り組んでおり、南房総という地域全体が一枚岩になっていると感じた。

浜田市においても鴨川市のように地域全体が一体となり、観光客を集めていく事が必要だと考える。

具体的には、

- ・市が地元の企業や住民との話し合いを行い、連携を強めて問題に取り組む
- ・宿泊施設の充実
- ・浜田市のホームページに地元の企業、施設のリンク先を載せる。
- ・自然や農業などを生かした新たな観光資源を開発する
- ・他大学の施設を誘致する
- ・松江や出雲の学校からの遠足や旅行客を誘致する
- ・部活動の大会を開く
- ・石見地方全体が連携して、観光客を呼び込む
- ・石見地方として全国に PR 活動を行う

以上のような政策でより多くの観光客を呼び込む事が出来るのではないかと考える。

参考文献

- 「鴨川観光協会」 <http://www.resort-kamogawa.net/> 2011年1月12日取得
「ドラぷら」
<http://www.driveplaza.com/etc/aqualine.html> 2011年1月12日取得
「日蓮正宗」 <http://www.nichirenshoshu.or.jp/> 2011年1月13日取得
「鴨川市役所ホームページ」
<http://www.city.kamogawa.lg.jp/JP/> 2011年1月13日取得
「かもがわ観光ガイドブック」

(水原 俊樹)



(6)学園をテーマにしたまちづくり(城西国際大学観光学部の事例)

・はじめに

千葉県鴨川市。浜田市と同規模の人口を擁し、また島根県立大学と同規模の城西国際大学を擁している街だ。私たちは大学を中心とした街づくりを調べるため、平成 22 年 12 月同市の同大学観光学部に行き実際に調査してみた。

・城西国際大学観光学部

①概略

- ・ 1965 年、城西国際大学が開学。
- ・ 2006 年、観光立国推進基本法制定に先がけ、幅広い視点から観光をとらえるため、千葉県鴨川市に安房キャンパス(観光学部)を開設。
- ・ 「新しいツーリズム」創設を模索しながら、観光業界へ人材を輩出している。



②島根県立大学との共通点

- ・ 少人数の単科キャンパス(約 400 名)
- ・ 多くの留学生を受け入れている(99 名)
- ・ 浜田市と同規模の都市(約 40,000 人弱)
- ・ 大都市へのアクセスコスト(東京都心から約 1 時間半、往復¥5,000)

③活動

i. 地域マネジメント・フィールド教育

地域をマネジメントすることで、「訪れても良い、住んでも良い」地域づくりを目指すプロジェクト。講義科目で学んだ内容をいかし、実際にフィールドに出て行うことにより、知識をより確かなものとするを目的としている。

- ・ グリーンプロジェクト
- ・ 太海プロジェクト
- ・ 街づくり研究プロジェクト
- ・ 伝統文化と民話プロジェクト
- ・ 嶺岡林道さくら並木プロジェクト
- ・ 健康増進プロジェクト

ii. 「大学と連携した魅力ある観光地づくり推進事業研究報告書」の作成

千葉県商工労働部観光課と共同で平成 20 年に作成された全 274 頁に及ぶ報告書。千葉県の文化的景観と郷土景観に関する研究を中心に書かれており、他の地域との比較や、アンケート調査、観光的活用についてまとめられている。

④ 学生生活

・学内での豊富なイベント(上映会・講演会・市民や中高生との交流)
・観光学部協力会(会員 140 名)による後援(奨学金等)のもと、学生生活が営まれている。

- ・アパートの家賃¥50,000~60,000
- ・アルバイトの平均賃金¥800 台(千葉県最低賃金¥744)



・まとめ

今回の訪問によって分かったことは、大学と鴨川市の密接な連携と、大学内の教職員や学生による積極的な活動である。前者についてだが、年間数百万の観光客を集める鴨川市にとって学生アルバイトは不可欠な存在である。雇用の確保のみならず、前述の観光学部協力会の後援や、学生に対する割引等の各種優遇処置、市民・学生間のパートナーシップも密接な連携に関与していると見られた。また、大学側としても観光地の最前線として調査・研究が出来、学生による活動(各種プロジェクト)は更なる PR につながっている。後者についてだが、学生の主体的な活動が目立つ点である。前述の各種プロジェクトのみならず多くのイベントが企画されている。これらには教職員による大きな支援が見られる。

これらのことから、大学を中心とした街づくりを目指すにあたり必要なことは

① 大学側(教職員・学生問わず)の積極的な活動

本学学生の特徴として受動的な姿勢が目立つよう見受けられる。能動的に学び活動していく姿勢が無ければ、自分のものとするのが困難である。また、教職員の支援なしには困難である。これは大学の活気にも関わる問題であると思われる。

② 大学と市の密接な連携。

現状ではサークルやゼミ単位での連携が多いと思われる。さらに連携相手も公共団体が主だった相手である。企業との広域な連携を図っても良いのではないかと思われる。

③一方的な資本の流れを改める。

これは学生アルバイトの賃金に関係している。学生は浜田市を生活基盤としており、学費・家賃・生活費等大学がもたらす資本の投下による恩恵は、浜田市の経済に与える影響は決して小さくはない。しかし、学生のアルバイトによる収入は、支出と大きくかけ離れたものと言えるのではないか。労働条件の改善は難しい課題ではあるが、学生の住みやすい街づくりは、これからの浜田市の発展に大きく寄与するものではないか。

以上の3点であると私は考える。

・参考文献

パンフレット「城西国際大学 2011」

パンフレット「2010 ウェルネス交流デイ」

「平成20年度大学と連携した魅力ある観光地づくり推進事業研究報告書」

城西国際大学観光学部ウェルツーリズム学科ホームページ

<http://www.jiu.ac.jp/tourism/> 2010年12月17日、2011年1月22日取得

(池田 愛之)



(7)「夕日」をテーマとしたまちづくり①（沖縄西海岸の事例）

・はじめに

今回、私たちは浜田市の活性化ということを目標にゼミの活動を行ってきた。そこで、浜田市の観光の面にスポットをあて「より多くの観光客を浜田市に呼び込み、活性化を図るにはどうすればよいか。」という視点から調査を行った。私たちは浜田市が「夕陽の町」と呼ばれていることに注目し、同じく「夕陽の町」として名高い、沖縄県の西部の読谷村・北谷町を実際に訪れ研究を行った。そこで、本項では両者の観光地の比較と、「浜田市により多くの観光客を呼び込むには如何すれば良いのか」考えてみた

・北谷町

北谷町には、浜田市と同じく非常にきれいな「海」があり、ビーチをはじめとした観光資源として活用している。

沖縄県の西部には数多くのビーチがあり、観光客も多く訪れています。その中でも北谷町にある「サンセットビーチ」はとても人気があり、若者から家族づれなど幅広い年代の人々が訪れている。

・サンセットビーチ



サンセットビーチには、ビーチとしての機能はもちろんの事、サマーベッドやパラソルなどのグッズのレンタルやシャワー設備も整っており、ビーチバーベキューも手軽に楽しめるようになっている為、人々がそれぞれ思い思いのスタイルで海でのひとときを過ごしている。

また、サンセットビーチはイベント、撮影用にビーチを貸し出しており多くの観光客を集め、毎年様々なイベントが開催されています。2006年には、映画「涙そうそう」の撮影が行われ、大きな反響を呼んだ。

更にサンセットビーチには、「アメリカンビレッジ」が隣接しており、ショッピングやレストラン、映画を見に行く事も出来るようになっている。

一方で、浜田市の場合、代表的なビーチの国府海水浴場で比較してみると、ビーチそのものは申し分ないものの、その他の設備、サービスに関しては不十

分な点が多いと考えられる。また、イベントも少なく、観光客を呼び込むような大きな話題性は少ないと言える。更に、浜田市の代表的な国府海水浴場には、近くに「アクアス」がありますが、水族館だけでは、観光客が限定されてしまうと考えられる。

・ 読谷村・恩納村

読谷村には、「残波岬」と呼ばれる高さ約 30m の断崖が約 2km つづく岬があり、「残波岬灯台」から、岬を一望できるようになっていた。灯台は、大人 150 円、小人 20 円で手軽に入場でき素晴らしい景色を見ることができる。

・ 残波岬



・ 万座毛



また、恩納村には、写真のような象に似た岩ときれいな海が見渡せる、「万座毛」と呼ばれる景勝地があり多くの観光客が訪れている。

「万座毛」には駐車場も完備されており、そこに多くのお土産屋が立ち並んでいて、アロハシャツから三線まで様々なお土産を売っていました。お土産屋がある事で周囲の雰囲気には活気があり観光客の購買意欲をそそるものであった。

一方、浜田市においても、海浜公園や浜田湾を一望できる景観の良い場所が随所に見受けられる観光資源があるが、賑わう時期が限られていたり、地元の住民しか知らないような場所であったりする。多くの観光客が恒常的に賑わう場所にするためには、それらに付加価値をつける事が必要不可欠である。

・まとめ

以上のように、浜田市には「国府海水浴場」や「海浜公園」など観光資源が豊富に存在しているが、観光資源を放置しておくのみで上手く活用できていない。一方で沖縄県の北谷町・読谷村・恩納村を訪れてみると観光資源を非常に有効に活用しているという印象が残った。

そこで、浜田市の観光資源にも、上記にあったような付加価値を付けて積極的に PR 活動を行い、観光客を呼び込むことが必要であると考えます。

・参考文献

- 「読谷村ホームページ」 <http://www.yomitan.jp/> 2011年1月22日取得
「恩納村ホームページ」
<http://www.vill.onna.okinawa.jp/> 2011年1月22日取得
「北谷町ホームページ」 <http://www.chatana.jp/> 2011年1月22日取得
「サンセットビーチホームページ」
<http://www.uminikansya.com/> 2011年1月23日取得
「沖縄 travel」
<http://kokunai-tyo.mwt.co.jp/okinawa/> 2011年1月24日取得

(水原 俊樹)



(8)「夕日」をテーマとしたまちづくり②（ホームページの比較）

・はじめに

今回、私たちは浜田市の活性化ということを目標にゼミの活動を行ってきた。そこで、浜田市の観光の面にスポットをあて「より多くの観光客を浜田市に呼び込み、活性化を図るにはどうすればよいか。」という視点から調査を行った。そこで、本項ではホームページの比較を行い、「広報という点から、浜田市により多くの観光客を呼び込むには如何すれば良いのか」考えてみた。

・北谷町ホームページの特徴

- ・トップページに大きな写真(観光地など)が張り付けてある
- ・フラッシュアニメを積極的にもちいている
- ・文字数が少なく、非常に見やすい作りになっている
- ・観光客・訪来客ガイドのトピックには、「観光協会」「北谷町商工会」「北谷町メディアステーション」「北谷町ガイドキオスク」などのリンク先が張り付けてあり、すぐにそのホームページにリンク出来るようになっている



以上のように、北谷町のホームページは、見た目非常にシンプルな作りになっている。文字数が少なく手軽に見る事が出来る。また、フラッシュアニメの導入によって利用者に視覚的にうったえ、インパクトを与える事が出来る作りになっている。更に、詳しい案内については、クリック一つで各リンク先に一発でリンクする事が出来る為、町の観光的魅力を最大限に伝える事が出来ると思われる。

・ 読谷村ホームページの特徴

- ・ ホームページのトップに「沖縄の読谷村」という事が一目で分かる写真(シーサーと残波岬灯台)を載せて、利用者に対して分かりやすい作りになっている
- ・ リンク先のバナーが写真つきで非常に見やすくなっている
- ・ バスの時刻表にも一発でリンク出来る



http://www.yaguchi.jp/ 2013/03/01

以上のように、読谷村のホームページは、北谷と同じく、利用者に対して視覚的にうたえており、バスの時刻表などを載せる事によって、観光客を意識した作りとなっている。

・ 浜田市ホームページの特徴

- ・ 字数が多く、見にくい
- ・ 写真を貼ってあるが、特色が表わされていない
- ・ バナーを貼っているが、全てが埋まっていない



http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/ 2013/03/01

以上のように、浜田市のホームページは、非常に詳しく丁寧に書かれているが、堅く書かれており、見にくくなっている。また、写真が貼ってあるが、小さく表わされており、浜田市の豊富な自然や観光資源をアピール出来ないと感じた。更にバナーが「募集中」と書かれていたが、この点についても地元の企業などとの連携を強めていくべきだと感じた。

・まとめ

以上のように、浜田市のホームページと北谷町・読谷村のホームページを比較して、観光客から見てよりよいホームページに作り直す為には、

- ・浜田市の観光資源を前面に押し出した写真(海浜公園、アクアスなど)をトップページに張り付ける
- ・トップページは出来るだけ分かりやすく、シンプルに表現し、詳細はトップページからリンクさせる形に変える
- ・フラッシュアニメなどの工夫を加えたホームページ作りを行う
- ・地元企業や観光地との連携を深め、浜田市のホームページから企業や観光地のホームページに直接リンクが出来るように工夫する

などが挙げられる。そこで、これらの方法でホームページを改良する事によって、より多くの人々に浜田市の魅力を知ってもらい、観光客増大につながるのではないかと考える。

・沖縄と浜田のまとめ

浜田市と沖縄の北谷町、読谷村を比較してみると、沖縄の各地域は積極的に観光について取り組んでいるように感じた。具体的には、観光客を呼び込む為に地元企業や住民が一枚岩となり、取り組んでいるように感じた。

浜田市においても市が単体で考えるのではなく、地域が一体となって観光客を呼び込んでいく事が必要不可欠ではないかと考える。

・参考文献

「浜田市ホームページ」

<http://www.city.hamada.shimane.jp/> 2011年1月21日取得

「読谷村ホームページ」 <http://www.yomitan.jp/> 2011年1月22日取得

「北谷町ホームページ」 <http://www.chatana.jp/> 2011年1月22日取得

(池田 愛之)

5. まとめ

この調査研究から明らかになった点も多々あるが、なかでも興味深い点がいくつか提出されているためそれらを述べてここでの報告を終えることにしたい。

第一に、既述の報告からもわかるように、「中核となる組織や施設」が浜田市の発展には必要であるという点が挙げられる。歴史的資源や自然資源の活用によって発展している自治体や町に至っても、こうした核にある存在があったということである。

第二に、多くのことを総花的に羅列するのではなく、焦点を絞った観光資源であれば、その数は過少でも自治体や町の発展は達成が可能という点が挙げられる。当報告書に提出された事例においても、その町が発展している箇所はかなり限定されたところである。それでもそこには年間を通じて多くの人々が観光に訪れている実態がある。

第三に、歴史資源であっても自然資源であっても、そこへの接近には交通の利便性が重要であるということである。沖縄県の場合は軌道交通自体が限定されている歴史的背景があるため車両社会になっている実態があるが、このためには道路などを通じて目的地への接近が容易であるという状況が垣間見える。また、滋賀県の各自治体の場合においてはJRをはじめとした公共交通機関が発達しているため、その発着に対応した自治体独自の自治体交通が存在するという点である。ただ、単に交通機関が存在すればよいということではなく、時間的接近、接触が容易であるという事実である。この点は重要である。

最後に、本調査研究にも限界を伴っていたという点を指摘しておかなければならない。アンケート調査についても統計上のルールに沿って厳格に解析を行っているわけではない。また、その解析や分析においても厳密な理解がなされているわけではない点もあるように思われる。そうした点では本報告にも一定の限界が存在していると言わざるをえない。ただ、学生の視点から考えられる一定の点を提出できた点では一定の成果も期待できたのではないかと考えられる。

今後の課題としては、この調査研究を通じて、歴史資源の発掘の重要性に言及したい。幸いにも浜田市に旧親藩の「浜田藩」の城下町という貴重な歴史資源が存在する。これを通じて、浜田市と同規模の他の自治体の城下町の状況等も調査して、やがては「城下町・親藩サミットを通じたまちづくり論」を試みたいと考えている。

今回の調査研究ではとりわけ浜田市の関係者、本学内の関係者はもとより、現地調査での聞き取り等で多くの人々の助成を受けた。ここに改めて感謝の意を表したい。

光延 忠彦